

内視鏡検査にて十二指腸癌腫頭部浸潤と診断した。大量吐血の為緊急手術施行、腫頭十二指腸切除、横行結腸切除術にて止血せしめた。切除標本組織では腺癌と扁平上皮癌が混在する腺扁平上皮癌であった。以上極めてまれな十二指腸原発と思われる腺扁平上皮癌の1例を経験したので若干の文献的考察を加え報告した。

#### 15. 下血にて発見された転移性小腸腫瘍の1例

(社会保険山梨病院)

松山 秀樹・新井田正枝・山下由起子・  
久米川 啓・小沢 俊総・草野 佐・  
小俣 好作・田辺 誠

原発性肺癌は、他臓器の癌と比較し、転移の頻度が高く、転移臓器の分布も広い。他臓器転移は、肝、骨、副腎、腎、脳などに多く小腸への転移は稀である。小腸転移が生前に診断、治療された例は少なく、特に原発巣に対し切除術が行なわれていた例は、文献上、本邦では7例のみである。今回、肺癌の肺切除後、下血をきっかけに小腸転移を発見し、開腹術を施行した例を経験したので報告する。

#### 16. 回盲部癌に Castleman リンパ腫を合併した1例

(都立荏原病院外科)

中川 昌之・木下 祐宏・服部 博之・  
長谷川利弘・椋棒 豊・松井 渉・  
五味 明・川本 潔

(昭和大学第二病理)

風間 和男・塩川 章

Castleman リンパ腫は縦隔に好発する Giant lymph nodes hyperplasia で、偶然発見されることが多いが、腹腔内特に腸間膜に発生することは非常に稀有とされている。今回我々は回盲部癌手術中に、偶然 Castleman リンパ腫を腸間膜に発見したので若干の文献的考察を加えて報告する。

症例：65歳女性。家族歴・既往歴は特記すべきことなし。近医にて大腸癌検診の便潜血反応陽性で注腸検査を施行。回盲部癌の診断により当科紹介となった。諸検査にて同診断で手術施行し、術中 Treitz 靱帯から約10cm 肛門側の小腸間膜に直径約5cm 大の血管にとむ弾性硬の腫瘤があり摘出した。術後病理学的検索において Castleman リンパ腫と診断した。

#### 17. 小腸有茎移植を行なった結腸再建術の1例

(尾原病院) 金原 文英・原田 昌弘・  
飛田 洋一・尾原 徹司

(東京女子医科大学消化器病センター外科)

浜野 恭一

症例：74歳女性。S字状結腸癌によるイレウスで緊急手術、S字状結腸切除及び、横行結腸人工肛門造設を行なったが、術後6日目に縫合不全が発生した。

しかし、限局していたのでドレナージと栄養管理で経過をみた。その後、吻合部に強い狭窄を認め、人工肛門を閉鎖するにあたり、狭窄を起こした吻合部の切除と再吻合を計画した。

再手術後68日に行なわれたが、開腹時吻合部あるいは、口側結腸は全面的な癒着で覆われていた。我々は、広範の癒着剝離による過大侵襲を避ける為、狭窄部を小さな範囲で切除し、小腸の有茎移植を用いて小腸を間置し再建した。小腸は、注腸造影による高圧状態でも異常を認めず、術後臨床経過は良好であった。

#### 18. Adenomas, juvenile polyp に併発した直腸～S結腸 malacoplakia の1症例

(東口病院) 永井 規敬・大橋東二郎

(新潟大学第1病理)

成沢林太郎・石原 法子・渡辺 英伸

細胞質に富んだ大きな単核細胞の粘膜炎下層集積を特徴とする炎症性肉芽腫の malacoplakia (軟板症) は、尿路系に報告されるが消化管ではまれな疾患である。

症例：75歳、女性。S. 56年11月、57年11月血便のため他病院に入院。しかし症状は持続し、S. 58年2月当院に初診入院。直腸～S結腸に黄色調、径5mm前後の多発小結節を認め、同時に、S結腸、下行結腸、肝彎曲部で計7コの有茎ポリープを認め、2度にわたり polypectomy を施行。ポリープは1コは juvenile polyp。他は tubular adenomas であった。直腸～S結腸病変は、S. 58年11月 malacoplakia の病理診断となった。以来サラゾピリン1.5g分3投与を使用し、漸次血便は減少した。同時に直腸～S結腸病変は減少し、萎縮した粘膜に変化し、Biopsy 上も malacoplakia の病像は消失した。2年間経過観察中であるが再発の様相は見られていない。この症例は、第20回甲信越内視鏡地方会で報告した同一例である。

#### 19. 破裂による腹腔内出血を来した尾状葉原発肝細胞癌の1切除例

(都立豊島病院内科)

鴨川由美子・横山 聡・富松 昌彦・  
奈良 成子・北沢 栄次・新田 義朗・  
村上 義次

(同外科)

江口 礼紀・西川 正夫・上原 健一・  
河井 文健・小川 一平・上谷潤一郎・  
佐藤 正典・間 浩明・片田 雅孝・  
竹入 正彦

症例：58歳女性。主訴は腹痛、嘔吐。家族歴では弟に肝癌。既往歴ではS.38年にITPにて脾摘し輸血施行。現病歴はS.59年より慢性肝炎にて通院中であったが、S.60年7月27日夕、突然上腹部激痛出現した為入院。入院時腹部に圧痛と波動を触れ貧血を認めた。HBs Ag (-), HBc Ab (-), AFP>40ng/ml, トランスアミナーゼ上昇をみた。Echo, CT, Angiography, 腹水穿刺にて血性腹水と網膜内出血と診断し開腹した。開腹にて尾状葉に径4cmの腫瘍と出血点を認め、肝切除術施行した。索状型、Edmondson II型の肝細胞癌の破裂で非癌部は肝硬変だった。術後5ヵ月現在、AFP 52ng/ml, 転移なく、経過観察中である。

## 20. 典型的なアルコール硝子体のみられた1症例

(長汐病院内科) 本池 洋二・塚田 悦男  
(東京女子医大消化器病センター内科)

小幡 裕・久満 董樹

54歳男子の大酒家にみられたアルコール性肝炎の死後肝生検標本より、本邦では比較的稀れといわれているアルコール硝子体を光顕と電顕にて多数見出した。

アルコール硝子体は現在ではアルコール性障害以外の種々の疾患にも観察されており、アルコール肝に特異的なものとはいいがたいが、その起源、病因的意義には諸説がある。たとえばde Novo説、intermediate filament説であるが、塚田らはその形成には細胞の機能的失調が重要で変性粗面小胞体との関連性を強調している。また病因的にはpreneoplasiaの面よりも検討されており、いまだ多くの興味を持たれている。今回、アルコール硝子体の解明への貴重な1症例と考え報告した。

## 21. 合成DNAを用いたras点突然変異のスクリーニング

(国立がんセンター生物学部)

長原 光・野口 茂・西村 暹  
(東京女子医大消化器病センター内科)

小幡 裕

ras oncogeneの活性化を臨床例で検討した。プローブとしてras遺伝子の第12番目、61番目が正常及び点

突然変異を伴う19merの合成DNAを使用した。肝癌17例肝癌の非癌部組織19例胃癌15例について検討したところ、胃癌1例で正常のras遺伝子の増幅が認められた。これは、点突然変異を伴わず正常の遺伝子が増幅しても癌を引きおこし得る可能性を示す興味ある例である。今後、正常ras遺伝子の増幅に伴いmRNA及びP21(ras product)が増加しているのか検討する予定である。突然変異をもつ合成DNAをプローブにした場合、現在1例も変異を有する症例はみつかっていない。

## 22. 甲状腺腫瘍の超音波診断

—手術例105例を中心として—

(社会保険山梨病院)

新井田正枝・草野 佐・小沢 俊総・  
久米川 啓・山下由起子・松山 秀樹・  
飯田 龍一・小俣 好作・井口 孝伯

社会保険山梨病院では、昭和58年より成人病検診及人間ドックを受診した全例を対象に、スクリーニングとして、5MHzのプローブを用い、直接接触法にて、甲状腺の超音波検査を施行した。この結果、甲状腺の限局性病変が多数発見され、穿刺細胞診により、受診者全体の0.64%に、更に女性においては1.13%が悪性と診断された。エコー像で、内部不均一な像を呈し、砂粒状及石灰化像を有する境界の不明瞭なものに、悪性の多いことが判明した。昭和60年12月までの手術例は105例にのぼるが検診により発見された潜在小型甲状腺癌の手術適応について、今後、より検討が必要である。

## 23. 第3世代の内視鏡・電子スコープとその性能

—自験例870例を中心として—

(東京女子医科大学第二病院中検)

長谷川みち代・妹尾 文恵・片山 修・  
藤林真理子・矢川 裕一・市岡 四象

われわれは、1985年3月よりWelch Allyn社製Video Endoscopeを用いて、上部消化管内視鏡検査を行ってきた。この使用経験から、本器種の性能とその有用性について検討したので報告する。従来のスコープに較べやや径が太く、また先端硬性部が長いため、操作性にはまだ改良すべき点もあるが、この電子スコープの特徴として、1. イメージファイバーを通さず直接消化管内を観察できる。2. スコープの挿入開始から抜去まで連続的に画像をモニターテレビおよびVTRに記録できる。3. 随時画像を静止させ、ス